

毛皮のコートのマドンナ

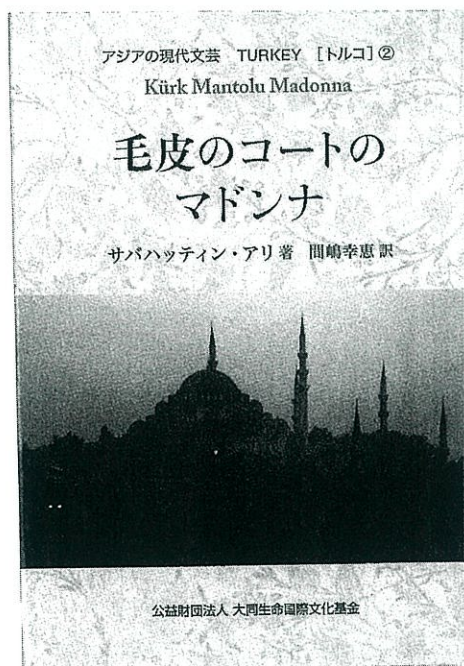
トルコ語通訳・翻訳者 間嶋 幸恵

大同生命国際文化基金の翻訳出版事業「アジアの現代文芸シリーズ」より、トルコ文学作品第二弾として、拙訳『毛皮のコートのマドンナ』（サバハッティン・アリ著）が2021年9月に刊行されました。

本作『毛皮のコートのマドンナ』は、トルコでの初版が今から80年近く前の作品であるにもかかわらず、今日においてもその作品世界は古びることなく、新たに若い世代の支持を獲得し続けているロングセラーです。

サバハッティン・アリ(1907 - 1948)は、オスマン帝国末期からトルコ共和国初期の激動の時代を生きた詩人・作家で、トルコの現代文学について語る時にその名を避けて通ることはできないほど大きな影響を残しました。一般的に「社会主義リアリズム作家」として知られており、民衆の視点から社会のありのままの姿を克明に描き出す彼の作風は、トルコの文壇に新たな潮流を生み、次世代につながる礎となりました。その影響は文学界にとどまらず、彼の詩や小説は、映画や音楽、TVドラマ、舞台作品など多岐に展開されています。

アリの代表作のひとつである本作『毛皮のコートのマドンナ』は、彼の作品の中でも異色のロマンチックな恋愛小説です。寡黙な初老の男ラーイフ・エフェンディの、ベルリンに留学していた若かりし日の回顧録の物語です。第一次世界大戦終結直後の荒廃したベルリンの街に留学生としてやってきたラーイフは、ある日展覧会で偶然見かけた“毛皮のコートをまとった女の自画像”に強烈な衝撃を受けます。そしてその作者の女性マリア・プーダーとの出会いが、彼の人生に大きな変化をもたらします。生まれ育った場所も立場もまったく異なるふたりが、



それぞれの孤独な魂が共鳴するかのようには惹かれ合っていく物語はしかし、思いがけない運命の歯車に導かれていきます。

ラーイフの過去とその赤裸々な心情は、ラーイフ・エフェンディの同僚である「俺」が彼の秘密のノートを紐解くことで読者に共有される作中作のスタイルで描かれているのが特徴的です。それを読み終えた時、「俺」が感じたように読者もまた、うわべからは計り知れなかったラーイフ・エフェンディという人物に真に出会ったことに気づかされます。そしてその奥に、作者サバハッティン・アリの人間に対する深い慈愛に満ちたまなざしを感じて頂くことができたなら、訳者として望外の喜びです。

本書は各国公立図書館や大学の図書館で貸し出されているほか、電子書籍として無料で公開されています。トルコで長らく愛され続けるこの珠玉の物語を、ぜひお楽しみください。

※電子書籍版は下記よりダウンロードできます。

<https://www.daido-life-fd.or.jp/business/publication/ebook>